

## 自然との共存 ～鳩の住む学校～

足利市立久野小学校教頭 塚原孝雄

現在の小学校に、今年の4月赴任した。校舎は広い田園の中央に位置し、多くの卒業生を見送った二階建の木造校舎は、二棟とも既に老朽化しているが、広い校庭と、自然に恵まれた公害の少ない地域で、教育を受けている子どもたちの幸せを、強く感じたものである。

しかし、この恵まれた学校にも、大きな悩みのある事に気づいた。それは、校舎が野鳩の住み家になっていることである。校舎北側の二階の窓を開けると、窓の敷居に鳩の糞が古く固まっているものや、新しいものが積み重なっている。何と不潔な事か、子どもたちが換気のため、窓を開けるのもためらうのではないだろうか。そのほか、裏庭、渡廊下の屋根の上などが、糞でひどく汚れている。

一方、これに対して、子どもたちはどのように感じているのだろうか。見ている限り、もう、それに馴れ切って、余り苦にもしていない様子で、体育館の出入口の屋根の下側に、巣作りし、雛を孵化している親鳩を見て、楽しんでいる。鳩も子どもたちに馴れ切って、キョロキョロと見下して、特に警戒している様子は見られない。子どもたちにとっても、可愛いさの方が先で、汚されるのは、さほど気にならないらしい。

しかし、衛生上、この汚れは何とかなければならないと、この事に取り組むことにした。

既に、上窓に板を取り付けて、鳩が止まらない様にした所など、今までも、この鳩の被害に対して、手を打っていた所が見られる。この板を、もっと広い範囲に打ち付けて、鳩を追うと云うよりも、上窓に止まりにくくしようと考えた。

まず、二階の上の小窓に、少しでも止まりにくくなるように、板を斜めに打ち付けることにした。その際、年間を通して、強風などで板が落下して、子どもたちが怪我をすることのないように、その点も気を使いながら、作業員さんと二人で仕事を進めた。高い場所で、不馴れな仕事だけにやりにくかった。仕事をしているとき、子どもたちが来て、「何をしているの」と不思議そうに質問してきた。そこで、「みんなが知っているように、鳩が窓の敷居の所を汚すので、窓の所に止まれないようにしているのだよ」と説明すると、「止まる所がなくなったら鳩が可愛そうだよ」と云う。子どもたちの心に映るのは、鳩の優しい面のみなのかも知れない。

その日の夕方、鳩の様子を見ていると、次から次へと時に帰って来る一団が、今朝までと異った様子に、戸惑いを見せる。隣の体育館の屋根に引き返すのが、多く見られた。また、止まらずそのまま校舎の屋根に引き返す。でも、帰巢性の強い鳩たちは、無理しても止まろうと試みて、逐には、傾斜した板の二、三枚に強引に止まって居るのが目につく。これは、やはり取り付け板の角度が、緩いせいかも知れない。

しかし、傾斜して居るために、止まり場所は、以前よりも狭くなっているわけで、よく見ると、体を細かく揺り動かしながら、無理して止まって居る。果して、これで幾日か過ぎれば、止まりづらいつと云うことで、場所を変えるのではないかと思い、しばらく様子を見ることにした。

夕方になると、飛んで来ては、また、引き返す鳩の群、次第に辺が暮れていくにつれて、中庭の便所や、体育館の屋根に場所を変え、それぞれ止まって、昨日までの時の様子を伺っている姿が印象的だ。そして、日毎に場所を変えるのが目立って来た。それでも、相変わらず何羽かは、無理をして止まるので、折角取り付けた板が、体の重みで下がってしまうのが出て来た。しかし、朝の巡視の際、窓の汚れ具合を見ると、前よりはぐっと良くなって来た。やはり効果が表われて来たようだ。

幾日立ったろうか、無理に止まろうとする鳩の群に、板が重みで耐えられなくなり、やがて落ちてしまった所も出てきた。そこで、今度は次のような方法を試みた。ビニール紐を窓枠に10cm位の間隔に、長さ30cm位のを下げることにした。風に揺れ動いて、恐れをなし、近寄らないののではないかと、これを実施した。最初は驚いて近寄らないが、日が経つに従って再び近寄ってくる鳩が見られた。そこで、今まで取り付けた板の上側に、これと平行に、針金を二段に張ることにした。これで、止まり場所は更に狭くなり、効果があるのではないかと思った。この考えをもとに仕事を進めた。場所が高く、足場も悪い。しかし、仕事を手伝ってくれた作業員さんが、実に手際よくやってくれた。仕事を終え、鳩の帰ってくる様子を見守った。

日暮と共に、次々と時に帰って来る鳩の数が増えて来た。よく見ると、直接帰るのではなく、一度周囲の建物の屋根に止まり、鳩なりに様子を伺っているのがわかる。ほとんどの鳩が、再び様子の変わった事に、不安を感じてか、屋根に引き返し、並んでいる。丁度夕焼の空をバックに、一列に鳩のシルエットとして、浮き出されていて、絵のようにきれいだ。秋の陽足の速さと共に、止まり場を失った鳩たちが、目的とはうらはらに哀れだ。やがて何羽かの群が、二本の針金に止まり、体を小さく振わせているのが見えた。何処までも諦め切れないのか、幾日かこのまま様子を伺うことにした。

やはり、諦め切れず止まりに来る鳩がいる。今度は脚の幅より広い間隔の螺旋線を作って、設置することにした。しかもその両端は固定して、空中で少し動くようにすれば、止まるのに、より不安定になるのではないかと、効果の程を期待した。結果としては、かなり効果があった。その代り、彼等は、今まで止まらなかった体育館の入口の屋根の下に、止まるようになった。早速渡廊下が糞で汚されるようになった。しかし、此処ならば掃除も簡単にできる。今までの様に、子どもたちの教室の窓際の汚れは無くなるだろう。

やがて、時を移動して貰った結果、実際そうだった。これで最初の目的は大方果せた。人間と同居となると、少しは住みにくいのも仕方がないだろう。このように、鳩を邪魔者扱いして来た様だが、要は鳩と共存するしかないのである。恐らく今の校舎であれば、鳩を皆無にすることは不可能である。

一方、この鳩との生活の中に見られる教育的な場面も見られたり、また、いろいろと考えさせられることもあった。

ある小雨の降る朝のことであった。裏庭を巡視していると、便所の北窓の所に群っていた鳩が、一斉に飛び立った。しかし、一羽だけはうずくまって、一向に飛びたとうとしない。何故だろうかと思いつきながら、静かに近寄ってみた。でも、相変わらず逃げようとしなない。しかも、何処となく弱々しい。見上げると、首を左右に振る。左眼が大きく膨らんでいた。眼球の動きなど全く見えず、ただ右眼だけがギョロギョロと動く。これでは、ほかの鳩たちと行動が共に出来ない筈だ。体もほかの鳩よりも一回り小さく、やせ細っている。恐らく片目では飛ぶことは勿論のこと、餌を取るのも一苦勞である

う。また、左眼が見えないということは、わたくしたちの人相の場合と同様に、右眼の不自由さよりも、更に哀れさを強く感じさせるものだ。この鳩を見ながら、毎日現気に登校する子どもたちを見る時、元気な子と一緒に、健康の優れない、しかも、無理しながら登校して来る子の様子やら、学習の遅れ勝ちな子どもたちの様々な場面を想像した。仲間と共に飛び立ち、さっそうと行動することさえ、ままたらぬこの鳩、それでも何とか努力して生きて来た。このやれば出来るという強い生活力に心を強く打たれ、また、一段と哀れさを深く感じた。何か自分の日頃の生活を振り返って見ると、この鳩から教えられるものが、多々あるような気がした。

最近、新聞やテレビなどで、小学生の自殺の事が報道されているが、苦しくとも、力強く生きることの大切さを、この鳩から教えられようとは思わなかった。

また、秋の冷気の加わる、ある朝のこと、職員室前にある松の木の下に、うずくまるように死んでいた鳩を見つけた子どもが、抱いてきて、「どうしたらいいの」と聞いた。そこで、早速裏庭の桃の木の根元へ子どもたちと一緒に埋めてやった。このような事がほかにもあった。ある朝、野良猫にでもやられたのか、玄関の西側に、首のない鳩の死骸があった。あたり一面、羽毛が飛び散っており、子どもたちが、恐る恐る近づいて見ていた。忍びなく、これも前回と同様に、早速裏庭の隅に埋めてやった。

道徳で、動物の愛護や、生命の尊重を取り上げているが、肌で知るこの教育の効果はどうだろうか。

一方、鳩による大きな害としては、残暑の厳しい九月上旬、校舎内に、家ダニが発生して、職員を悩ました。早速薬剤師と相談して、放課後薬剤撒布を実施した。

二学期の終わりになって、雨に打たれて屋根の上で、しょんぼりしている鳩の姿に、これからの冬の厳しい寒さからも守ってやるため、小屋を作ることにした。三学期になって、早速作業員さんに頼んで、子どもたちの古机や木箱などを利用して、取り敢えず六箱作り、体育館への渡廊下の屋根の上を中心に、それぞれ適当な場所に設置した。一箇所に十羽から三十羽ぐらい入れるような大きさである。最初は、何やら警戒気味だった鳩たちも、やがて馴れ、間もなく出入りするようになった。鳩の害に悩まされて、いろいろと工夫をし、最後に鳩小屋を作るまでになったが、これからは、小屋を増やす予定なので、おそらく百羽余の鳩が心地よく住みついてくれることを願っている。今では巣作りを始めた組も見られるようになった。

これからは、校舎に住みついている鳩たちの扱い方を工夫して、大いに学習面にこれを生かして行きたいと思う。

## 評

人類は常に自然と接している。自然を離れて生きられない。子供のころから自然に接し、自然の中に生きてこそ豊かな心が養われると思う。現代の子供は極端な表現をすれば心の枯渇した子供である。自然の偉大さに気づかせ、自然のおりなすさまざまな神秘や生命の現象などについて、直線的に感動の対象として受けとめさせることは、教育の場としての望ましい学校のあり方だと思います。その点筆者は、学校管理の面から非常に御苦労なされたが、それを教育的に対処し、自然との共存をなしたことは、たいへん喜ばしいことで、教師としての心細い配慮がみられ敬服いたします。